

## 復元製作実施設計

[復元資料名] <small>ファンゾー よこ笛</small> 半笙 (横笛)																									
[原資料名] 半笙	[指定] なし																								
[年代] 19 世紀	[作者] ー																								
[所蔵] 東京国立博物館	[所蔵番号] H3591																								
<p>[選定理由]</p> <p>笛は音高の調子を定めるチューナーの役割があり、往時の音楽の音の高さを考える上で重要な楽器である。しかし笛は消耗品であり、また演奏者自身で製作・保管することが多いため、琉球王国時代の笛が現存する例はほぼなく、その製作工程や技術等はまだ十分に解明されていない。王国時代末期の作例を模造復元することで当時の楽器製作技術を明らかにするとともに、王国時代の音色を含めた復元を試みるため復元対象とする。</p>																									
<p>[保存状態]</p> <p>両端の嵌装部が取り外せる。笛膜は付随していない。</p>																									
<p>[法量]</p> <table border="0"> <tr> <td>全長</td> <td>: 68.8 cm</td> <td>歌口～第 3 孔</td> <td>: 20.5 cm</td> </tr> <tr> <td>歌口～響孔</td> <td>: 7.00 cm</td> <td>歌口～第 2 孔</td> <td>: 23.0 cm</td> </tr> <tr> <td>歌口～裏孔</td> <td>: 30.0 cm</td> <td>歌口～第 1 孔</td> <td>: 25.8 cm</td> </tr> <tr> <td>歌口～第 6 孔</td> <td>: 12.5 cm</td> <td>歌口～飾孔①</td> <td>: 32.5 cm</td> </tr> <tr> <td>歌口～第 5 孔</td> <td>: 15.2 cm</td> <td>歌口～飾孔②</td> <td>: 34.7 cm</td> </tr> <tr> <td>歌口～第 4 孔</td> <td>: 17.7 cm</td> <td>管径</td> <td>: 2.0 cm</td> </tr> </table>		全長	: 68.8 cm	歌口～第 3 孔	: 20.5 cm	歌口～響孔	: 7.00 cm	歌口～第 2 孔	: 23.0 cm	歌口～裏孔	: 30.0 cm	歌口～第 1 孔	: 25.8 cm	歌口～第 6 孔	: 12.5 cm	歌口～飾孔①	: 32.5 cm	歌口～第 5 孔	: 15.2 cm	歌口～飾孔②	: 34.7 cm	歌口～第 4 孔	: 17.7 cm	管径	: 2.0 cm
全長	: 68.8 cm	歌口～第 3 孔	: 20.5 cm																						
歌口～響孔	: 7.00 cm	歌口～第 2 孔	: 23.0 cm																						
歌口～裏孔	: 30.0 cm	歌口～第 1 孔	: 25.8 cm																						
歌口～第 6 孔	: 12.5 cm	歌口～飾孔①	: 32.5 cm																						
歌口～第 5 孔	: 15.2 cm	歌口～飾孔②	: 34.7 cm																						
歌口～第 4 孔	: 17.7 cm	管径	: 2.0 cm																						
<p>[素材・材質]</p> <p>竹製</p>																									
<p>[技法]</p> <p>漆塗 (両端に黒檀を嵌装)</p>	<p>[付属]</p> <p>紫絹製 (カシレイと同色) の房</p>																								
<p>[想定される科学調査]</p> <p>CT 撮影</p>																									
<p>[主たる材料調達先]</p> <p>監修委員または製作担当者から調達ルートをヒアリング</p> <p>木材: 国産または中国産の竹を想定。黒檀は県内三線製作者から調達。</p> <p>漆: 国内漆業者</p> <p>房: 国内で入手可能な絹を想定</p>																									

[年度別工程表]

年度	製作作業内容
2024（令和6）年	①国外調査
	②製作図作成及び試作
	③材料調達
2025（令和7）年	①本製作
	②本体調律
	③塗り
	④装飾

[製作仕様]

木材：管には国産または中国産の竹、嵌装部には黒檀を想定。調査を踏まえ、監修者・製作者・事務局で協議し決定する。

塗り：国産または中国産の漆を想定。

巻：熟覧調査や科学分析結果を参考に巻きを行い、金で仕上げる。

房：東京国立博物館所蔵「カシレイ」(K-25929)を類例とし国内で入手可能な絹を想定。

笛膜：調査を踏まえ、監修者・製作者・事務局で協議し決定する。



「カシレイ」(K-25929)

[https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/tnm/K-25929?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/K-25929?locale=ja)

類似事例調査を参考に監修者、製作者、事務局で相談の上決定する。国内で入手可能な材料を想定。現在入手困難な材料については代替材の使用も検討する。

[備考]

- ・明治17(1884)年沖縄県より購入  
(経緯)

明治15(1882)年ドイツによって琉球王国の民族文化ならびに製品の収集が行われた。これらのコレクションがドイツに向けて出港した後、ほぼ同じ規模の内容ものももう一度収集され、博物局（現在の東京国立博物館）に収められた。

- ・昭和12(1937)年に「水牛の飾りをつけた」、「塗替え」をした記録が残る
- ・資料名称については当初から「半笙」で登録されている
- ・御座楽、御庭楽で用いる楽器か

- ・房飾りと逆側の端の穴から先は、蠟のようなものが詰められており内側が見えない
- ・内側に塗りの跡のようなものが見られる
- ・両端の黒い部分(水牛の角またはコクタンか)が取り外せる(左右逆か?)
- ・嵌装部の大きさは左右で異なる
- ・巻きの種類は糸か。糸を巻いた上にまぜものを塗り、金で仕上げている
- ・竹のような素材だが節は見当たらない
- ・笛膜は確認できない。

[調査]

2023年9月8日 熟覧調査

[資料名] 半笙



クーチョー [復元資料名] 胡弓	
[原資料名] 胡弓	[指定] なし
[年代] 19世紀	[作者] ー
[所蔵] 那覇市歴史博物館	[所蔵番号]
<p>[選定理由]</p> <p>胡弓は琉球古典音楽等で歌三線とともに用いられ、地謡を形成する楽器であるが、奏者の少なさもあり王国時代の古い資料はほとんど残っていない。また胴周囲のべっ甲、象牙を含む装飾技法は現代に伝わっておらず、棹の長さや接ぎといった特徴も現代のものとは異なる。第Ⅰ期で培った胴巻きが技術が活用できる。</p>	
<p>[保存状態]</p> <p>ウマ（駒）は付属していない。</p>	
<p>[法量]</p> <p>棹の長さ 68.5 cm 心の長さ 27 cm 猿尾（象牙） 1.8 cm</p>	
<p>[素材・材質]</p> <p>コクタン</p>	
[技法]	[付属]
漆塗り	弓、台、松脂
<p>[想定される科学調査]</p> <p>CT 撮影</p>	
<p>[主たる材料の調達先]</p> <p>木材 : 県内三線製作者等から調達。棹は黒檀、弓、ウマは竹を想定  漆 : 国内漆業者  べっ甲 : 国内取扱業者（第Ⅰ期の例：森田商店）など  象牙 : 国内取扱業者（岡田象牙店など）  房 : 国内で入手可能な絹を想定  絃 : 絹絃を想定  蛇皮 : 県内三線製作者等から調達  弓 : 県内楽器店等から調達。沖縄県産の馬を使うことも検討。</p>	

[年度別工程表]	
年度	製作作業内容
2024（令和6）年	①県外調査
	②製作図作成
	③材料調達
2025（令和7）年	①棹試作
	②チーガ試作
	③組み立て
2026（令和8）年	①棹木地製作
	②チーガ木地製作
	③カラクイ製作
	④胴巻き製作
	⑤弓製作
2027（令和9）年	①棹、弓漆塗り
	②チーガ蛇皮張り
	③組み立て
<p><b>[製作仕様]</b></p> <p>棹　　：棹の心は接ぎを行う。</p> <p>チーガ：べっ甲で胴周囲を覆い象牙の鉸で留める。</p> <p>類似事例調査を参考に監修者、製作者、事務局で相談の上決定する。国内で入手可能な材料を想定。現在入手困難な材料については代替材の使用も検討する。</p>	
<p><b>[備考]</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金武家資料。金武良仁（1873-1936）愛用の胡弓</li> <li>・蛇皮を張った上に直接べっ甲を当て、鉸で留めている</li> <li>・胴巻きはべっ甲のような薄い茶系色だが、べっ甲らしい模様がなく、細かい斜線状の模様が見える</li> <li>・鉸は左右6点ずつ留められ、計12個。素材は象牙と推測される。大きさと形にバラつきがあり、平らなものと丸いものが混在している。平らが当初で、丸が後補か</li> <li>・チーガの素材は紫檀か？（仲嶺氏による）</li> <li>・チーガの裏は16枚に彫られている</li> <li>・チーガの裏に松脂が付着</li> <li>・胴巻きの一部が赤い絵の具のようなもので着色している</li> </ul>	

- ・棹は角が立っていて、とてもきれいな形
- ・カラクイの穴が低めの位置に開いている
- ・カラクイは六角
- ・糸蔵の中には金箔。赤みがかっているのは漆の経年変化か
- ・弓の上部には金武家の家紋（丸に三）が入っている
- ・弓の9ヵ所を糸で結んでいる

[類例・参考]

- ・東京国立博物館所蔵『胡弓 H3589』19世紀



[調査]

- ・2023年2月28日 熟覧調査

[資料名] 胡弓



2 cm

4.8 cm

チーガの穴 (上)  
縦 2.2、横 1.5、  
厚み 1.5 cm

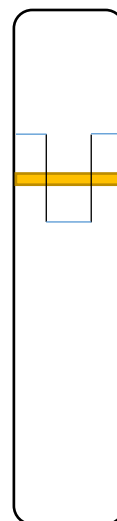
鉸が欠損している

チーガの穴 (下)  
縦 1.9、横 1.1、  
厚み 1.5 cm



図解

心が接がれている様子





[資料名] 胡弓





[復元資料名] <sup>シメデーク</sup> 締太鼓															
[原資料名] 締太鼓	[指定] なし														
[年代] 19世紀	[作者] ー														
[所蔵] 東京国立博物館	[所蔵番号] H3588														
<p>[選定理由]</p> <p>琉球王国時代の楽器製作技法はまだ十分に解明されておらず、特に締太鼓は現存例が少なく、本資料は現在のところ来歴が分かる最も古い締太鼓である。王国時代の形態をとどめる貴重な資料であり、沖縄の太鼓研究にも寄与すべく復元対象とする。</p>															
<p>[保存状態]</p> <p>良好</p>															
<p>[法量] ※参考文献より引用</p> <p>径 : 33.5 cm 高 : 15.5 cm 金幅 : 4.5 cm 金縦 : 2.0 cm</p>	<p>胴径 : 23.0 cm 穴径 : 0.9~1.0 cm 皮内径 : 25.0 cm リム内径 : 21.0 cm</p>														
<p>[素材・材質]</p> <p>黒漆、一部金泥</p>															
[技法] ー	[付属] なし														
<p>[想定される科学調査]</p> <p>CT 撮影</p>															
<p>[主たる材料の調達先]</p> <p>木材、皮、紐：製作者から調達</p>															
<p>[年度別工程表]</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>製作作業内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">2024 (令和6) 年</td> <td>① 県外調査</td> </tr> <tr> <td>② 製作図作成</td> </tr> <tr> <td>③ 試作</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">2025 (令和7) 年</td> <td>① 材料調達</td> </tr> <tr> <td>② 皮製作</td> </tr> <tr> <td>③ 木枠製作</td> </tr> <tr> <td>④ 紐製作</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">2026 (令和8) 年</td> <td>① 皮仕上げ</td> </tr> <tr> <td>② 組み立て</td> </tr> </tbody> </table>		年度	製作作業内容	2024 (令和6) 年	① 県外調査	② 製作図作成	③ 試作	2025 (令和7) 年	① 材料調達	② 皮製作	③ 木枠製作	④ 紐製作	2026 (令和8) 年	① 皮仕上げ	② 組み立て
年度	製作作業内容														
2024 (令和6) 年	① 県外調査														
	② 製作図作成														
	③ 試作														
2025 (令和7) 年	① 材料調達														
	② 皮製作														
	③ 木枠製作														
	④ 紐製作														
2026 (令和8) 年	① 皮仕上げ														
	② 組み立て														

**[製作仕様]**

木枠の木材は杉を想定。皮は牛皮を用い、漆で仕上げる。

調査を踏まえ、監修者・製作者・事務局で協議し決定する。国内で入手可能な材料を想定。現在入手困難な材料については代替材の使用も検討する。

**[備考]**

- ・ 明治 17(1884)年 8 月 沖縄県より購入
- ・ 太鼓両面をシュロ縄で締める、それぞれ 10 穴あり
- ・ 調緒（紐）は新しい印象
- ・ 紐を通す穴の大きさに差がある。穴の処理に粗さがある
- ・ 皮に塗り跡（刷毛跡）が見える。黒の上に白か
- ・ 皮にはっきりと筒の縁（リム）の跡がついている
- ・ 琉球とヤマトで締太鼓の形状、製作技法を比較する必要がある

**[調査]**

2023 年 9 月 8 日 熟覧調査

[資料名] 締太鼓



[復元資料名] 招月園旧蔵三線 <small>しょうげつえんきゆうざうさんせん</small>	
[原資料名] 三線	[指定] なし
[年代] 19世紀	[作者] ー
[所蔵] 東京音楽大学附属民族音楽研究所	[所蔵番号]
[選定理由] <p>胴巻きにべっ甲、鯨のひげ、象牙が施されている資料は数点しかなく、その製作技術は現在の三線製作者には継承されていない。第Ⅰ期で培った胴巻きの技術を活用することができ、三線の中でも数少ない作例であるため復元対象とする。</p>	
[保存状態] <p>胴巻きが一部外れている。</p>	
[法量] <p>全長： 79.7 cm</p>	
[素材・材質] <p>コクタン</p>	
[技法] <p>べっ甲巻き</p>	[付属] <p>なし</p>
[想定される科学調査] <p>CT 撮影</p>	
[主たる材料の調達先] <p>木材： 県内三線製作者等から調達。棹は黒檀、胴はイヌマキ、ウマは竹を想定  漆： 国内漆業者  べっ甲： 国内取扱業者（第Ⅰ期の例：森田商店）など  象牙： 国内取扱業者（岡田象牙店など）  鯨の髭： 国内取扱業者（第Ⅰ期の例：神田つり具）など  房： 国内で入手可能な絹を想定  絃： 絹絃を想定  蛇皮： 県内三線製作者等から調達</p>	

[年度別工程表]	
年度	製作作業内容
2024（令和6）年	①県外調査
	②製作図作成
	③木材、装飾調達
2025（令和7）年	①棹試作
	②チーガ試作
	③組み立て
2026（令和8）年	①棹木地製作
	②チーガ木地製作
	③カラクイ製作
	④胴巻き製作
2027（令和9）年	①棹漆塗り
	②チーガ蛇皮張り
	③組み立て

**[製作仕様]**

チーガ：べっ甲で胴周囲を覆い鯨のひげ、象牙の鋸で留める。べっ甲の内側には龍を描いた和紙を置く。類似事例調査を参考に監修者、製作者、事務局で相談の上決定する。国内で入手可能な材料を想定。現在入手困難な材料については代替材の使用も検討する。

**[備考]**

- ・ 棹は天や鳩胸の形状から南風原型に近い型であった
- ・ 全体にすり漆が施される。糸蔵内側に金箔は見られなかった
- ・ 心に割れがあり
- ・ 胴にカシガー縫いの痕があり楔打ちにて蛇皮を張ったと思われる
- ・ カラクイはコクタンで象牙の装飾はなし
- ・ べっ甲内側の和紙に三爪の龍が描かれている
- ・ 象牙の鋸は右側はほとんど外れている。片側に14個取り付けられている
- ・ 鯨のひげも右側は破損し無い状態。片側2本を重ねてつなぐのではなく上下1本ずつ使用されているようである
- ・ 蛇皮は両面とも補修の痕があり

**[類例・参考]**

- ・ 徳川美術館、徳川ミュージアム、東京国立博物館、(一財)沖縄美ら島財団

**[調査]**

令和2年10月8日 熟覧調査

[資料名] 三線

